

○藤永真史 1・東山みや子 2・梁 宝成 3・小坂能尚 2

長野県内のパプリカに発生しているウイルス病害の発生状況

Fujinaga, M., Higashiyama, M., Ryang, B.-S. and Kosaka, Y.: Incidence of viruses infecting paprika (*Capsicum annuum* cv.) in Nagano Prefecture

長野県の重要な生産振興品目のパプリカでは、毎年、ウイルス病による被害が問題となっている。そこで、発生実態を把握するため、2006～2010年に県内主要栽培地域の罹病株から採取した193検体をDAS-ELISA法またはRIPA法にて検定した。その結果、CMVが39.4%と最も多く検出され、次いでINSVが37.3%、TSWVが22.8%、BBWVが0.5%であった。各ウイルスの時期別の検出頻度をみると、CMVは春季から夏季の気温上昇期、TSWVは夏季高温期、INSVは春季の低温期に最も高かった。罹病株の症状はTSWVが最も激しく、著しい収量低下をもたらす果実の凹凸、葉の奇形や株の萎縮であった。CMVでは葉のモザイクおよびクロロシス、果実の小さな凹凸等が認められた。一方、INSVは育苗期に大型輪紋症状から検出されたものの、生育期にはほとんど検出されなくなった。以上から、県内のパプリカではTSWVおよびCMVによる経済的被害が大きいと判断された。

(1 長野野花試・2 京都農技セ生資セ・3 京都微研)